

氏 名 : 熊 澤 由美子  
学 位 の 種 類 : 博士 (健康科学)  
学 位 記 番 号 : 研博第 52 号  
学位記授与年月日 : 令和 3 年 3 月 10 日  
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条 1 号該当  
論 文 題 目 : 一市の特定健康診査・特定保健指導における  
「アルコール使用障害スクリーニングと減酒支援 (SBI)」  
ーSBI の介入評価と保健指導実施者の態度ー  
論文審査委員 : 主査 大 山 博 史  
副査 古 川 照 美  
副査 反 町 吉 秀

## 論 文 内 容 の 要 旨

### I はじめに

アルコールの多飲による健康障害の具体的な介入方法として、2013 年第二期特定健診・特定保健指導においてアルコール使用障害スクリーニング S (AUDIT) とその評価結果に基づく減酒支援 BI (ブルーフインターベンション) の手引きが示されている。減酒支援 (以下 SBI) は、国際的に活発に実践されているが、我が国では 2012 年「アルコール健康障害対策基本法」成立以降も積極的な取り組みには至っていない。SBI の実践の鍵を握るプライマリヘルスケアの従事者について、WHO のマニュアルには従事者自身のアルコールに対する態度が課題であることが述べられている。先行研究では、AUDIT の得点の高い人ほど、節酒意向を示す人が多いことが報告され、地域には節酒意向をもつ住民が潜在化していると考えられる。SBI に関する知見はさまざまな母集団、治療特性、状況から求められるため、今回の研究では、アルコールの生産地であり消費地である北東北地方の一市から、SBI の介入評価と保健指導実施者の SBI のプロセスを通しての態度を明らかにして実践の可能性を探る。

### 2 研究の目的

#### 【研究課題 I】

北東北地方の一市の特定健康診査・保健指導の場において、SBI を行い、その介入効果について評価を行う。

#### 【研究課題Ⅱ】

一市の特定健康診査・保健指導に携わる保健指導実施者が、SBI の介入を通して地域の実情をどうとらえ、SBI にどのような気づきや価値を見出していたのか、保健指導実施者の態度を明らかにする。

### 3 研究の方法と対象

#### 1) 対象

##### 【研究課題Ⅰ】

一市の特定健康診査の対象者で標準的問診項目から毎日飲酒する人で 1 合以上と答えた住民より系統的抽出法で対象を選定し、最終的に 30 人を対象とした。

##### 【研究課題Ⅱ】

一市の保健指導実施者で SBI に携わった保健師および管理栄養士計 11 人

#### 2) 方法

##### 【研究課題Ⅰ】 前後比較試験

##### 【研究課題Ⅱ】 混合研究法

#### 3) 研究内容と分析方法

##### 【研究課題Ⅰ】

介入前と介入後の評価について AUDIT 及び AUDIT-C を主要評価項目とし、統計的手法で分析を行った。

##### 【研究課題Ⅱ】

- (1) 態度尺度 AAPPQ22 項目を SBI の前後に測定し統計的手法で分析を行った。
- (2) インタビューガイドを基に半構造的にフォーカス・グループインタビューを行い、得られたデータは質的記述的手法で分析を行った。

#### 4) 倫理的配慮

県立青森保健大学の研究倫理委員会の審査による承認(承認番号:1874)を得て実施した。

### 4 結果

##### 【研究課題Ⅰ】

- (1) SBI 前の AUDIT スコアは平均  $13.0 \pm 3.46$ 、介入 6 か月後の AUDIT スコアは  $10.53 \pm 3.57$  であった。Wilcoxon 符合付順位和検定の結果、SBI 後の AUDIT スコアの減少に関して有意な差がみられた ( $p < 0.01$ )。介入前の AUDIT-C スコアは  $7.53 \pm 1.94$  で、介入 6 か月後は  $6.9 \pm 1.84$  であった。同じく Wilcoxon 符合付順位和検定の結果、介入 6 か月後の AUDIT-C スコアは有意な減少がみられた ( $p < 0.05$ )。
- (2) SBI 後に AUDI-C スコアが「改善した」と「変化なし」または「悪化した」群と 2 つに区分し従属変数とし、介入前後で有意差が認められた生活と健康の意識調査項目と

飲酒日記の取組状況を独立変数に投入し、多重ロジスティック回帰分析を行った。その結果、有意な差は認められなかったが、オッズ比でみると自己管理の変化(OR:1.695)、飲酒日記(OR:1.878)の結果がみられた。

#### 【研究課題Ⅱ】

- (1) 態度尺度 AAPPQ 全 22 項目の下位 5 項目「看護の自信」「同僚のサポート」「看護への興味・関心」「役割に伴う自尊心」「対応困難」について、介入前後の比較で Wilcoxon 符号付順位和検定の結果、「看護の自信」で有意な差が見られた ( $P<0.05$ )。
- (2) 保健指導実施者は、SBI 前は、過去のアルコール問題への負のイメージや飲酒に肯定的な環境から【アルコール問題に肯定的になれず減酒支援に期待できない】態度が示された。SBI 後は、対象者からのよい反応や減酒が周囲にも広がる喜びを保健指導実施者は感じていた。＜健康に向かう力のある人たちに出会い、アルコールへのイメージが変わる＞と語り、保健指導実施者は【減酒支援で健康に向かう力を高めあうことができる】態度を示していた。今後に向けて、保健指導実施者は【正しい知識を身につけ多方面からアルコールと健康を住民と一緒に考えていく】態度で臨もうとしていた。
- (3) 保健指導実施者は、記録やお互いの相談から＜自分たちで考え、支えあい保健指導力をつけた＞ことは、AAPPQ 尺度の「看護の自信」の有意な差にも現れていた。

## 5 考察

#### 【研究課題Ⅰ】

AUDIT スコア及び AUDIT-C スコアが有意に低下し、飲酒によるリスクの減少の結果が得られた。しかし、主要な評価項目としては十分とはいえず、介入の評価項目の再検討の必要がある。AUDIT スコアの核となる AUDIT-C スコアが改善した背景として、飲酒日記をつける自己管理能力の向上がある程度影響をもたらした考え、飲酒日記を用いた介入の意義が確認された。

#### 【研究課題Ⅱ】

保健指導実施者は、SBI 前は【アルコール問題に肯定的になれず減酒支援に期待できない】態度を示していた。保健指導者の過去の経験や地域の実情に配慮した支援者支援が求められる。SBI 後の保健指導実施者の【減酒支援で健康に向かう力を高めあうことができる】態度には、節酒意向を持った健康に向える対象者との出会いからよい反応を得たり、減酒が周囲に広がる喜びを体験しており、SBI はアルコールのイメージを変える機会となることが示唆された。保健指導実施者が考え、支えあい保健指導力をつけていたことから、今後の SBI に向けた可能性を示唆するものと考察された。

## 論文審査結果の要旨

アルコール依存症対策や多量飲酒対策の世界的な取り組みとして、アルコール使用障害特定テスト（AUDIT）を用いた介入プログラムが報告されているが、日本における知見の蓄積は十分とは言えない。さらに、指導を担当する保健指導従事者について、AUDITを用いた減酒支援（SBI）に関する態度は明らかになっているとは言い難い。本論文は、保健指導の場において、介入としてのSBIを行い、その効果について前後比較による評価を行う課題Ⅰと、保健指導実施者のSBIの介入にどのような気づきや価値を見出していたのかを質的に明らかにする課題Ⅱで構成されている。課題Ⅰにおいて、参加者に飲酒リスクの低減が見られたこと、また、課題Ⅱにおいて保健指導実施者の保健指導力の向上がうかがわれたことから、AUDITを用いたSBIの実施可能性が示された。本論文による知見は、国内外に広く活用が期待できる。以上のことから、博士（健康科学）の学位授与に値する。